

『午前十時 (04/02)』

土曜日の十時です
春の日はけだるいです
風が空中をなでています
鳩が二羽飛んでいます

土曜日の午後一時です
春の日はどんよりです
お空は雲に隠されています
火の見矢倉が屋根を見えています

私は疲れて眠ります
きつとよい夢が
私を包むことでしょう
きつとね……きつとね

『暗闇 (04/03)』

黒いビロードの
カーテンで
総てを包んでしまう

暗黒の闇

正直者には
一日の疲れを癒す
眠りの精が降りてくる

権力者には
苦悶と眠りのない
時間が始まる

あなたはどちら
あなたはどちら

どんな人でも
時間がくれば
必ず死ぬのです

一日の闇が降りてきたら
さあ
眠りの精に任せましょう

さあ

『会話 (04/06)』

あのね樹木の
みなさん
なにをそんなに
楽しそうに
話しているのですか

風さん風さん
なにか嬉しいことでも
あるのですか
向こうの菜の花畑で
蝶さんと遊んでいたでしょう

小鳥さん小鳥さん
空の高いところから
ここはどうなふうに
見えるのですか
ねえねえ聞かせて下さい

みんなみんな
なにを話しているのかな
どうして人間には
聞こえないのかな
ねえねえ如何してなのかな

『桜 (04/08)』

咲きましたね
満開に見事ですね
桜並木は
どこも人の宴会で
この冬の冷たさを
捨てているんですね

桜色ですか
一斤染ですか
ベビーピンクですか
年輪をそれぞれ染めた
一片一片が風に舞って
今年も咲きました

陽を浴びて
人生の思い出語りを
人生の夢語りを
そうですよ
桜吹雪の宴の舞を
忘れてはいけませんよ

『闇 (04/10)』

何もかも
暗黒の世界へと
塗り潰す
闇の黒き世界

人の悲しみも
人の愛しさも
人の恋しさも
人の辛さも

闇に消して
切なる人の心を
明日へと追いやる

闇のカーテン

『風 (04/13)』

ひゅーっつと
家の戸をきしませて
風が吹いています

ヒューーっつと
野原の上空を
風が吹いて行きます

微風の微笑みに
和んだ灯火の心は
荒れた風に
身を震わせて祈ります

ひゅーっつと
野原の上空を
風が吹いて行きます

ヒューーっ
家の戸をききませて
風が吹いています

『灯 (04/15)』

窓の向こうの
暗闇に小さく
点灯している
人家の灯火よ

汽車はガトゴト
音を発てて走っています
ピーと警笛を鳴らして
一目散に進んでいます

暗闇の人家の
灯火が恋しいのです
一日を終えた
安堵と憩が恋しいのです

暗闇にじっと
点灯している
憩の明かりよ
人家の灯火よ

『夢 (04/21)』

夢を見ました
砂漠の中に一人
立っている自分の夢を

夢を見ました
一人で泣いている
自分の幻を

夢を見ました
起きたら
忘れてしまいました

一人居の部屋の中で
昨日も今日も明日も

一人で眠っています

夢を見ました
自分の夢を
一人居の部屋で

『いつか (04/22)』

いつかきつと愛をつかむ
ことがあるのだろうか
愛を失った心が

いつかきつと幸せを
手にすることが
あるのだろうか

私の人生よ
私の生きよ
私の心よ

いつかきつと愛を
手にすることがあるうか
消えそうな私の人生が

それでも
いつかきつとキラリと
光る宝石を刻みたい

私の人生よ
私の生きよ
愛しい私の心よ

いつかきつと愛を
どこかでつかむことが
出来るだろうから

いつかきつと
どこかでつかむことが
できるであろうから

『日 (04/28)』

久しぶりに
遠くの町へ
行ってきたのです

良いですね
山河がある町は

良いですね
緑の風うねりは

久しぶりに
山河や雲へ
思いが飛びました

良いですね
瓦のある家並は

きつと詩の

ある町なのです

久しぶりに
心の部屋へ
自然がきたのです

End all 1994/04

『楽しみ (05/01)』

たった一つの
私の楽しみ
それは
詩を書くこと

たった一つの
楽しみ
それは詩を
書くこと

だって何も
なんにも
わからないから
寂しいけど

本を読んでも
難しすぎて
解らないから
悲しいけど

たった一つの
私の楽しみ
それは
詩を書くこと

『森の中 (05/09)』

深い森の中に
一軒の家が有ります

鬱蒼とした木々と
赤いトタンの屋根が

目を上の方へやると
枝葉が風に揺れています

上空の青空と陽が
キラキラ斑いています

男は森の空き地で
トントんと薪を割っています

女は家の前で
一心に剪定しています

鳥のさえずりとリスが通り
風がひんやりとすぎて行く

男はトントんと
カマドの薪、風呂の薪

女は脚立を移動して
二本目の若木取り組んでいます

森の中は今日も静かで
暗くなった食卓はきつと

明かりに照され神への祈りと

無事の祈りの慎ましいのでしよう

『闇の中 (05/19)』

夜の部屋で一人
 神様に祈りを捧げています
 : どーか 助けてください : : と
 神に祈りを捧げているんです
 生きていることが
 辛くて・苦しくて・痛くて
 生きていることが
 たまらなくて・どうしようもなくて
 悲しくて・やるせなくて
 神様に「助けて下さい : : と
 一心に祈りを続けているんです

一人いの部屋で私は
 神に祈りを捧げているんです
 誰にも言えない苦しみを
 一心に神に祈っているんです
 誰にも言えない悩みを
 一心に神に祈っているんです
 : 助けてください : : と

それから詩を書いて
 詩を書いて詩を書いて
 それでも私は神様に
 祈らずにはいられないのです
 : 助けてください : : と

どうしようもなく痛くて
 どうしようもなくそれがつらくて
 生きているのがどうしようもなく
 なんにも見えないから
 なんにもわからないから
 希望も夢もみーな消えそうだから
 詩を書いて詩を書いて
 詩を書いてそんな暖房すら
 もう消えそうなのです
 一人いの部屋で私は
 神様に祈りを捧げています
 : どーか 助けてください : : と

『心の中 (05/31)』

心の中は
 いつも
 淋しい海

太陽は見えないし
 時として映るは荒海
 舟の影すらなく
 波の動きだけの世界

心の中は
 いつも
 淋しい海

希望は見えないし
 心に映るは暗黒の海
 安ろう漂いはなく
 波だけが動いて行く

心の中は
 いつも
 淋しい海